

## ～平成25年度博物館学芸員専門講座を実施しました～

《12月4日（水）～6日（金）》

「ニーズを創出する博物館」をテーマに、全国各地から36名の受講者が社研に集い、講義、演習等を通して多様なニーズに積極的に対応することや、想定される多様な利用者の潜在的なニーズを掘り起こし、新たなニーズを創り出していく視点等について学びました。

### 基調講義 広義のアウトリーチをめざして

公益財団法人日本博物館協会 専務理事 半田 昌之

アウトリーチとは、「手を差し伸べること」の意味で、外に出て機能を果たす経営戦略的な攻めのアウトリーチと、利用弱者に手を差し伸べる社会的存在意義を支える務めとしてのアウトリーチがある。

博物館の存在意義は、過去を資源に未来を考えること。その要石となるのが学芸員である。



### 受講者の感想から

〇ルール美術館の入館料で失業者、生活保護受給者は無料という話を聞いて、美術館は象牙の塔ではなく、社会とつながっていることを改めて実感した。今後とも「開かれた美術館」を意識して日々の業務に努めていきたい。

### 行政説明 博物館関連施策の動向

文部科学省生涯学習政策局社会教育課博物館振興係 係長 中上 郁夫  
文化庁文化財部美術学芸課 課長補佐 光石 恭典

「博物館の現状と課題」「文化財の保存」「東日本大震災への対応」等について豊富な資料と数値的なデータを用いながら説明いただいた。

### 講義 教育メディアとしての展示

#### ～展示というアプローチからニーズの創出を考える～

東京国立近代美術館 美術課長 蔵屋 美香

博物館資料を公共の財産と考えると、国民だれもが見る権利があるはずである。博物館が何を持っていて、いつ見せるのかということ伝える必要がある。

展示について博物館の意図を100%伝えることは難しい。展示室の解説も、花を見せたいときと色使いを見せたいときは書き方が違う。一步離れたところから所属館を見ることで、自館に今何が必要なのか、あるいは必要ないのかが見えてくる。



### 講義 博物館と成人・高齢者の学習の特性

#### ～成人・高齢者へのアプローチからニーズの創出を考える～

大阪教育大学教育学部 教授 堀 薫夫

高齢者には主に、対処的ニーズ、表現的ニーズ、貢献的ニーズ、影響的ニーズ、超越的ニーズがあり、そのようなニーズや学習特性を踏まえた事業展開が必要である。高齢者率が25%を超える日本社会における博物館の存在意義を真剣に考えていかなければならない。

### 受講者の感想から

〇今の博物館や類似施設の様子が数字、データをもとによく理解できた。文化財の保存について大きく振り返ることができた。

〇展示の仕方を絵画作品だけでなく、様々なものから共通のものを導き出す方法があったのかと目からうろこでした。収蔵品の活用、展示方法について新しいヒントを得ることができた。

〇高齢者の歴史へのニーズから、当館でも多くの来館、ガイド、研修の依頼がある。その中で難しい点もあったが、この講義で解決の糸口を見いだせたように思う。



## 交流プログラム 社研カフェ

日常的な連絡ができるような関係をつくるために、所属館の特徴的な取組、職務上困っていること等について情報交換を行った。受講者同士、今後も継続できるようなネットワークづくりの機会となった。



## 講義・演習 博物館における学習の多様性

～多様な利用者へのアプローチからニーズの創出を考える～

桜美林大学人文学系 准教授 金子 淳



### 【講義】

本当にニーズは多様化しているのかという問題意識、「連携」は目的ではなく手段であり、連携以前に行為体それぞれのもつ独自のリソースの検証をすることが必要という視点など、よく聞かれる言葉だが普段見落としがちな本質の部分に目を向けることが大切である。

30年後の未来を見据えて、未来の日本のために私たちが今何をしなければならないのかを真剣に考え、未来への種まきを行っていく必要がある。

### 【演習】

「新たな利用者層と博物館をつなぐためには何が必要か」というテーマで、親子、高校生・大学生、外国人など、具体的なターゲットを設定し、新たな利用者層に対応するための知恵や具体的なアイデアを出し合った。

### 受講者の感想から

○「ニーズの多様化」について聞こえのよい常とう句としてではなく、本当の意味でのニーズのとらえ方、また館として「ゆずれない部分」をどうするかということろまで言及してくださったことに感謝。ご自身の体験をもとに具体例を紹介していただいたことも参考になった。

○視覚障害の方が普段来館されることがほとんどないので、恥ずかしながらニーズなどについて深く考えたことがなかった。しかし、様々な事例を聞いて自館でも応用できる部分があると思った。障害のある方の立場に立つてみることの必要性を感じた。

○当館にも敷地内に豊かな自然があり、今までは余り活用、あるいは紹介ができていなかったが、本講義を受けていくつかの活用方法を思いつくことができた。また、地域・行政との連携についても多くの気づきを得られた。

## シンポジウム 博物館の可能性をさぐる

コーディネーター	新潟県立歴史博物館 専門研究員	山本 哲也
登壇者	国立西洋美術館 主任研究員	横山 佐紀
	岡山県立博物館 学芸員 (副参事)	信江 啓子
	筑波大学大学院人間総合科学研究科	半田 こずえ

・できない理由を捜す前に、数ある方法の中から一つだけでもできることを考える姿勢が大切である。

・海外の博物館の実践から「視覚だけではなく他の感覚を使う鑑賞」、「ことばによる記述」等が博物館の可能性を広げるための示唆となる。

・博物館と福祉の連携による地域回想法を取り入れることで、高齢者が元気に、地域が元気になると同時に、博物館を利用しにくかった高齢者の利用促進につながる。

・「暗いと怖い」「キャプションが読めない」など、障害のある方や外国人等の個々の来館者のニーズに徹底的に向き合うことでその背後にある共通性に気づく。できることから柔軟に考え、だれもが気兼ねなく足を運べる博物館になって欲しい。



## 特別講義 ニーズを創出する博物館

～人を元気に、命を元気に、地域を元気にする博物館～

公益財団法人富山市ファミリーパーク公社 園長 山本 茂行

人は、生き物や自然と共存せずして生存できない。生き物に関心のない生き物は絶滅する。動物園はいのちの博物館として、生き物や自然との共存を教える生物多様性の最前線とならなければならない。そのためには、身近なものにある価値に目を向けた取組を大切にしながら、未来を見据えた長期的な戦略をもち、市民、地域、企業、保育、学校、大学、市民、行政などのステイクホルダーと連携して取り組んでいくことが重要となる。



～講座における、学びとつながりが、各地域で生かされますように～